

# ピーマン・(パプリカ)の栽培法 2012/2/22

## 育苗

●良質の有機質により保肥力をもたせ、水はけがよいものを用いて根張りのよいがっちりした苗に仕上げる。とくに、ピーマン類は育苗日数が長いので、培土の肥持ちの良し悪しが育苗の成否に直結する。

●育苗中は適湿を保ち、昼間は気温26～28℃、夜間は14～16℃を目安に管理して、徒長させないように心がける。

## 植えつけの準備

耕土が浅いと地表近くに根を張り、細根が多いので、深く耕やして水排けをよくし、有機物を多く入れて出来るだけ根を深く張らせるようにする。また、生育期間が非常に長く、霜が降りるまでなり続けるので、肥切れさせない肥培管理が大切。土作りが終われば、うね幅120cmの高めのうね作りをする。

## 植えつけ

平坦地の暖かい所は4月中～下旬、中山間地は5月中旬が植えつけの適期で、地温が12℃以上になってから晴天無風の日を選んで行なう。老化苗定植では、活着不良となりやすいので、1番花開花直前苗の定植が望ましい。植え付けは畝幅150～170cmで1条植えとし、2本仕立てなら株間25～30cm、4本仕立てなら40～50cmとする。深植えにならないよう

に、株元を少し盛り高にし、たっぷり水やりをする。

## 植えつけ後の手入れ

### 《施肥》

元肥は土壌条件によって異なるが、目安として10a当たりのチッソ成分量で20～25kg前後を施す。追肥は、最初に着果させた果実が肥大期を迎えたところから始める。1回当たりの追肥量は10a当たりのチッソ成分量で約3kgとし、2～3週の間隔で施す。

### 《整枝・誘引》

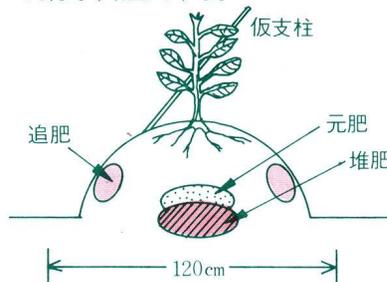
第1次分枝までの側枝は取り除き、第2次分枝のうち強めの2～4本を主枝として仕立て、側枝は1～2節で摘芯する。完熟収穫では着果負荷が大きいので、側枝には着果させず主枝に着果させる。着果数が増えるにつれ、果実の重みで枝が折れたり、垂れ下がったりするので、誘引は遅れないよう早めに行う。

### 《摘果・収穫》

1～2番果は樹勢強化のため摘果を基本とし、3～4番果も草勢が弱めなら、緑色のまま収穫する。開花して60日前後で着色、完熟するが、わずかに緑が残っているか、全体が着色した直後に収穫すれば、その後の日もちがよい。着果が多くなりすぎたり、草勢が弱ってきた場合は幼果を収穫する。株の負担を軽減し、長期にわたり草勢を維持することが良品多収のポイント。

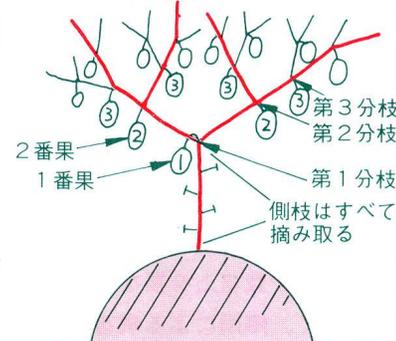
## 1. うね作りと定植

深耕し、うねの中央に堆肥、元肥を入れてうね立てする。



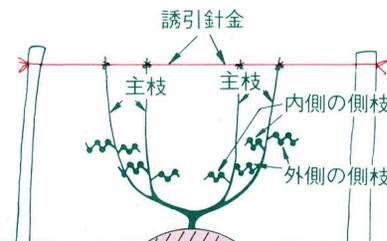
株間45cmの1条植、浅植えとし株元を少し盛り高にしてやる。

## 2. 整枝と着果



1番果の直下から2～3本分枝するので、これを主枝とする。主枝から分枝をくり返して、その節に着果していく。

## 3. 大きくなって内部が混み合ってきたら…



空間ができるように誘引せん定し、よく光が入るようにする。

第1分枝・第2分枝のなかで太い分枝を主枝として誘引していく。これに生ずる側枝を外側のものは3～4果、内側のものは2～3果でせん定し、収穫後1節を残して切り返しせん定する。

## 4. 収穫



開花後15～20日程で収穫期に入る。実が大きくなったものから早めに収穫する。